

命題 0.1: 変分法の基本原理

任意の状態ベクトル $|\psi\rangle$ に対して $|\psi\rangle$ のエネルギーを与える関数 $E(\psi)$ について、式 (0.0.1) なる不等式が成り立つ。

$$E(\psi) = \frac{\langle\psi|\hat{H}|\psi\rangle}{\langle\psi|\psi\rangle} \geq E_0 \quad (0.0.1)$$

ただし E_0 は \hat{H} の固有エネルギーの中で最低のものである。

Proof. 任意の状態ベクトル $|\psi\rangle$ を Hilbert 空間の基底 $|k\rangle$ を用いて、

$$|\psi\rangle = \sum_k c_k |k\rangle \quad (0.0.2)$$

と展開する。左から $\langle k'|$ を作用させると

$$\langle k'|\psi\rangle = \sum_k c_k \langle k'|k\rangle = \sum_k c_k \delta_{k',k} = c_{k'} \quad (0.0.3)$$

を得る。式 (0.0.3) は任意の k に対して成り立つので式 (0.0.2) は以下のように変形できる。

$$|\psi\rangle = \sum_k \langle k|\psi\rangle |k\rangle \quad (0.0.4)$$

$$= \sum_k |k\rangle \langle k|\psi\rangle \quad (0.0.5)$$

式 (0.0.5) を用いて式 (0.0.1) の分子を以下のように変形する。

$$\langle\psi|\hat{H}|\psi\rangle = \langle\psi|\hat{H} \sum_k |k\rangle \langle k|\psi\rangle \quad (0.0.6)$$

$$= \sum_k \langle\psi|\hat{H}|k\rangle \langle k|\psi\rangle \quad (0.0.7)$$

$$= \sum_k E_k \langle\psi|k\rangle \langle k|\psi\rangle \quad (0.0.8)$$

$$= \sum_k E_k |\langle k|\psi\rangle|^2 \quad (0.0.9)$$

また、

$$\langle\psi|\psi\rangle = \sum_k |\langle k|\psi\rangle|^2 \quad (0.0.10)$$

であるから、

$$E(\psi) = \frac{\langle\psi|\hat{H}|\psi\rangle}{\langle\psi|\psi\rangle} \quad (0.0.11)$$

$$= \frac{\sum_k E_k |\langle k|\psi\rangle|^2}{\sum_k |\langle k|\psi\rangle|^2} \quad (0.0.12)$$

$$\geq \frac{\sum_k E_0 |\langle k|\psi\rangle|^2}{\sum_k |\langle k|\psi\rangle|^2} = E_0 \quad (0.0.13)$$

を得る。 □

命題 0.1 より、あらゆる状態ベクトル $|\psi\rangle$ のエネルギーは基底エネルギー E_0 以上である。変分法は、

1. 試行関数 $|\psi\rangle$ をたくさん用意し,
2. それぞれのエネルギー $E(\psi)$ を計算し,
3. その中で最小の $E(\psi)$ を E_0 の近似解とする

近似法である.

例題 0.1

ポテンシャル $V(x) = \lambda x^4$ 中に粒子がある系を考える. この系の Hamiltonian は

$$\hat{H} = -\frac{\hbar^2}{2m} \frac{d^2}{dx^2} + \lambda x^4 \quad (0.0.14)$$

である. 予想される基底状態が満たすべき条件は

- $x = 0$ で存在確率が最大
- $|x| \rightarrow \infty$ で存在確率が 0
- 節がない^a

である. この条件と変分法を用いて, エネルギーの近似値を求めよ.

^a節があると微係数が大きい点が存在し, これは運動エネルギーを大きくしてしまう.

試行関数として $\psi(x, \alpha) = e^{-\frac{\alpha x^2}{2}}$, $\alpha > 0$ を考える. 式 (0.0.1) の右辺を計算すると,

$$E(\alpha) = \frac{\int \psi^* \hat{H} \psi dx}{\int \psi^* \psi dx} \quad (0.0.15)$$

$$= \frac{\hbar^2 \alpha}{4m} + \frac{3\lambda}{4\alpha^2} \quad (0.0.16)$$

を得る. 第 1 項は運動エネルギーを, 第 2 項はポテンシャルエネルギーを, それぞれ表している^a. 式 (0.0.15) の最小値が基底エネルギー E_0 の近似解である. よって, $\frac{d}{d\alpha} E(\alpha_0) = 0$ となる α_0 を式 (0.0.15) に代入することで近似解,

$$E(\alpha_0) = \frac{3}{8} \left(\frac{6\hbar^4 \lambda}{m^2} \right)^{1/3} \quad (0.0.17)$$

を得る.

^aポテンシャルエネルギーの項は α が大きくなるほど小さくなる. これは, 波動関数が狭まり $x = 0$ での存在確率が大きくなるためである. 一方, 運動エネルギーの項は α が大きくなるほど大きくなる. これは, 不確定性関係 $\Delta x \Delta p \geq \frac{\hbar}{2}$ より, 運動量のばらつきが大きくなるためである.